11　次の文は、『うつほ物語』の一節である。右大臣の妻は、忠こそという幼い男児を残して亡くなった。同じ頃、左大臣も亡くなり、左大臣の北の方（女君）は千蔭との再婚を切望するようになった。これを読んで、後の問に答えよ。　 〈京都大〉　二〇一五年度出題

　女君は、かく思ひて、山々寺々に修法行ひ、仏神に大願を立てたまへど、しるしなし。北の方、おほかたは神仏にも申さじ、この人に我かく思ふと言はむ、我、人のかしづく娘にもあらず、にもあらず、さらばこそまばゆくもあらめ、（１）これを放ちて、妻なき人のよろしきはいづこにかあらむ、恥を捨てて言ひ出でむと思して、のおとどの御の娘、あやきとて、めでたくかたちある童を使ひたまふ、それにありがたき装束をせさせて、かく聞こえて奉りたまふ。

　　「ここのみ繁きと思へどもまほす宿もありとか

　同じくは、同じ野にや思し召したまはぬ」とて、をかしき浅茅に御文さしたり。さて奉りたまふ。

　あやき、千蔭の御殿に参りて、に立てり。殿の人見つけて、「あやしく清らなる童かな」と見て、「いづくよりぞ」と問ふ。あやき、「左の大殿より」と答ふ。おどろきて御文を取り入れて見たまふ。あやしく、いかに思ほしてのたまふならむ、（２）世の人と思して、一人あればのたまふにやあらむと思ほして、長き葎を折らせて、御返し、

　　人はいされじとぞ思ふめ置きて露の消えにし宿の葎は

とて奉りたまふ。

　これよりうちはじめて、女はをかしきこともあはれなることも聞こえたまひつつ、「恥見せたまふな」と聞こえたまへば、やむごとなき人のせちにのたまふを、聞き過ぐしてやみなば、情けなきやうにもあり、人の御恥にもあり、さりとて、昔を忘ればこそあらめ、時々は通ひてまうでむかしと思して、まうで通ひたまふに、男はただ今三十余、女は五十余ばかりなり。よきほどなる親子ばかりなる中にも、千蔭のおとどは、忠こその母君よりほかに、女二人と見たまはず、かたち清らにうらうじく、年若きを見たまひて、固かるべき契りをして経たまひしほどに別れたまひしかば、いかならむ世に、ぼえたまへらむ人をだに見むと、吹く風、降る雨の脚にだにつけて嘆きわたりたまふほどに、心にもあらぬ人の、年老い、かたち醜きを見たまへば、（３）いとど昔のみ思ひ出でられて、まれにものしたまひては、心解けたることもなくてあれども、北の方はを尽くして労りたまふこと限りなし。

（『うつほ物語』より）

注（＊）かのおとどの御乳主＝亡くなった左大臣の乳母。

浅茅・葎＝いずれも雑草の名前。

かれじ＝「枯れじ」と「離れじ」との掛詞。

頼め置きて＝千蔭の妻が亡くなる間際、忠こその養育を頼むと遺言し

たことをいう。

らうらうじく＝上品な美しさをいう語。

おぼえたまへらむ人＝似ていらっしゃる人。

問１　傍線部（１）～（３）を、主語や指示語の内容を明らかにしつつ、現代語訳せよ。

◎問２　波線部はどのようなことを言っているのか、直前の和歌の内容を踏まえて説明せよ。

問３　はじめ再婚に乗り気でなかった千蔭が、左大臣の北の方のもとに通うようになったのはなぜか、説明せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　（１）＝Ａ千蔭様を逃しては、Ｂ妻のいない人で結婚相手としてふさわしい人がどこにいようか、いやいるはずがない

結びの反語の訳ができていないものは全体０。この条件を満たした解答について、次の基準で見る。

Ａ＝５〔「これ」を「千蔭（右大臣も可）」だと具体化してないもの、「放ちて」が「逃して」や「～以外に」というニュアンスで訳せていないものはそれぞれ減点３。〕

Ｂ＝５〔格助詞「の」が同格で訳せていないものは０。「結婚相手として」などの補いのないものは減点３。「よろしき」は「悪くない」なども可。〕

（２）＝Ａ女君は私のことを世間並みの人と思いなさって、Ｂ私が妻に死なれて独り身でいるので Ｃこのようにおっしゃるのであろうか

Ａ＝４〔「女君」、「私」が抜けている場合、尊敬語訳の不備はそれぞれ減点２。〕

Ｂ＝３〔「私」が抜けている場合は減点２。〕

Ｃ＝３〔疑問の訳になっていないものは０。尊敬語訳の不備は減点２。〕

（3）＝Ａ右大臣は、ますます、亡き妻と過ごした昔のことばかりが自然と思い出されて、Ｂたまに女君を訪れても、彼女に心を許すこともなくいるけれども

Ａ＝５〔主語が抜けている場合は０。「昔」は「死んだ妻」という置き換えも可。〕

Ｂ＝５〔「ものす」を「行く」「通う」の意味でとれていないものや、「女君」が抜けている場合は０。〕

問２　Ａ夫に死なれて私は「浅茅が宿」に暮らすような寂しさを感じているが、あなたも妻を亡くして「葎の宿」に暮らすような寂しい思いをしていると聞くので、Ｂ同じ寂しい境遇ならば結婚して共に生きようと考えてほしいということ。

まとめの部分で「結婚しよう」「共に生きよう」「慰め合おう」などの表現がないものは全体０。Ａ・Ｂどちらかに「寂しい」「孤独だ」などの表現がないものは減点５。

Ａ＝５〔「私」と「あなた」が同じ境遇だという意味で解釈できていないものは０。「浅茅」「葎」をそろって使っていないものは減点２。〕

Ｂ＝５〔「結婚」のないものは減点３。文末の不備は減点２。〕

問３　Ａ高貴な女君がＢ風情のあることを言い、「私に恥をかかせるな」とまで言ってＣ熱心に求婚するのを断れば、Ｄ男として薄情な気もし、相手に恥をかかせることにもなるので、たまに訪れるくらいなら許容できると考えたから。

Ａ＝２〔場所は問わないが「やむごとなき」の訳は解答に必須。〕

Ｂ＝３〔二点そろっていること。一点のみは減点２。〕

Ｃ＝２／Ｄ＝３〔二点そろっていること。一点のみは減点２。〕

# 【現代語訳】

　女君（＝左大臣の北の方）は、このように（千蔭の右大臣を恋しく）思って、山々寺々に祈禱を指示し、仏神に（右大臣と結婚するという）大願を立て（て祈願）なさるが、効験はない。（そこで）北の方は、「だいたい（もう）神仏にも（願いを）申し上げるまい、この方（＝右大臣）に（直接）私はこんなにも（あなたを）慕っていると言おう、自分は、親が大切に育てる娘でもないし、（夫がいる）妻でもない、もしそうだとしたら（このような行為は）恥ずかしいこともあるだろうが、（今の自分には何も恥ずかしいことはなく、）問１（１）千蔭様を逃しては、妻のいない人で結婚相手としてふさわしい人がどこにいようか、いやいるはずがない、恥を捨てて（自分の思いを）打ち明けよう」と思いなさって、亡くなった左大臣の乳母の娘で、「あやき」といって、すばらしく器量のよい童を（以前から）お使いになっているが、その童にめったにないような立派な衣装を着せて、このように（歌を詠み）申し上げて（その使いとして、右大臣のもとへ）参上させなさる。

　　　「ここ（＝私の家）だけが、浅茅が生い繁っているのかと思うけれども、またほかにも葎を生い繁らせている宿（＝あなたの家）もあるとか（うかがいましたよ）。

　同じことなら、同じ野に（住もう）とお思いになってくださらないか」といって、趣のある浅茅にお手紙をさした。そして（右大臣に）さしあげなさる。

　あやきは、千蔭の大臣のおに参上して、門のところに立った。邸の人が（それを）見つけて、「不思議なほど美しい少女だな」と見て、「どこから（来たの）か」と尋ねる。あやきは、「左大臣殿から（来ました）」と答える。（邸の人たちは）びっくりしてお手紙を取り入れて（それを、右大臣が）ご覧になる。（右大臣は、）「おかしい、どうお思いになって（こんなことを）おっしゃるのだろうか、問１（２）（女君は私のことを）世間並みの人と思いなさって、（私が妻に死なれて）独り身でいるので（このように）おっしゃるのであろうか」と思いなさって、長い葎を折らせて、（それにさした）御返歌、

　　　「露が（落ちて）消えた葎は枯れるまい」ということでもないのだが、さあ、ほかの人はどうかわからないが、（私は）離れまいと思う。（子どものことを）頼み置いて妻が亡くなったこの葎の宿からは。

と書いて（あやきに託して女君に）さしあげなさる。

　このことを始めとして、女君は興趣あることにつけても風情あることにつけても（右大臣に手紙で）申し上げなさっては、「（私に）恥をかかせなさるな」と申し上げなさるので、（右大臣も、）「身分の高い方が切実におっしゃるのを、聞き流してそのままにしてしまったならば、情け知らずのようでもあり、相手に恥をかかせることでもあり、そうかといって、昔（の亡き妻）のことを忘れたならばともかくそんなことはあるはずもないので、（真剣な交際はできないが）ときどきは通い申し上げようよ」とお思いになって、通い申し上げなさるが、男君はただ今三十余歳、女君は五十余歳ほどである。（見かけは）ちょうどよいくらいの親子ほどの仲であるが、千蔭の大臣は、「忠こそ」の母君のほかに、誰一人女性とは契りなさらず、容貌は美しく上品で、年も若い妻（＝亡き妻）と結婚なさって、固いはずの契りを結んで暮らしていらっしゃったうちに死別なさったので、「一体どのような世に、（亡き妻に）せめて似ていらっしゃる人とだけでも結婚できるだろうか（、いやそんなことができるはずがない）」と、吹く風、降る雨脚につけてさえずっとお嘆きになるうちに、心にもない人で、年も老い、容貌も醜い人（＝女君）と縁を結びなさるので、問１（３）（右大臣は、）ますます、（亡き妻と過ごした）昔のことばかりが自然と思い出されて、たまに（女君を）訪れても、（彼女に）心を許すこともなくいるけれども、北の方は（右大臣を）財宝のかぎりを尽くして大切にお扱いになることはこの上ない。